

構成方法の基礎的適用／事例研究(2)

一造形構築論の教育に関する一考察一

デザイン学科

田 中 淳

A Basic Apprication of the Method of
Composition for the Design-Plan
by Atsushi (Jun) Tanaka

目 次

(本号ではⅢまで、Ⅳ以下次号)

- I. はじめに
- II. めざす方向として
- III. アナロジーとしての「文章と造形」
- IV. 要素と要件―「文章と造形」
- V. 構築の手順と方法
- VI. 結論／おわりに
参考文献・謝辞

I. はじめに

「視覚言語」というG・ケペッシュ著作をはじめ、「視覚芸術の文法」という用語法のもとに、造形にかかわる知識を、ある種の法則性で集約・総括し、造形教育論として一教程を構築しようとする試みは、多くの先達たちによって、資料が提供され続けてきています。

しかし、私はここであえて、この小論を、この難題に向かう私の現時点での解答であると考えています。勿論“文法”ということばにこだわらず、考えてみたいのです。

構成という語は必ずしも造形のためだけに使われてはいません。文章構成・意味構成という部面から、造形での構成を考えようと、何かしら私の背後から、後押ししてくれる力強いものを、感じて踏切ろうとするのです。

あと戻りできない、のっぴきならない、そういったことへ、私自身駆り立てるのは何でしょう。私

にもよくわかりません。ただ無駄でない推論をしたい、ほんの少しでも、私の研究室所属の留学生を始め、私の畏友・知人たちの眼に止る有効な議論を結実させたい。

これだけが、向こう見ずな冒険に賭けてみようとする私の意気ごみなのです。

ことに、この小論の構想は、私の構成教育とよばれてきた基礎デザインの教育を担当しはじめてきて以来、ずっと私の内部にわだかまってきたといえるでしょう。

大それた論文より、私の小さな独りごとの形から、コンセプトを少しづつ、はっきりさせていきたいのです。

II. めざす方向として

私が心の中に思いえがき、その思いを他人に伝えたり、知ってもらおうとする時、さまざまな方策を講じないわけにはいきません。たとえば、嬉しさを伝えようとするとき、嬉しい表情・顔つきで訴えかけることもあり、また、嬉しさを果してどこに始まったかなど話しかけることもあるわけです。こうした伝達の意思を、身ぶり手ぶり、あるいは顔つき、だけでなく伝える最も原初的な方法はボディタッチとか、何か思いがけないやり方になるかも知れません。しかし、これ以上に、人間の心の深奥にある激しい感情を伝達するには、そしてさらに細かい思念や情動を伝えるには、やはり言語以上のものは見出しえないと考えま

す。しかもこの「言語」のうちで、主として音声を通じて、明瞭に伝える、いわゆる“聴覚によるコミュニケーション”のほかに、眼に見える形で伝達する、さらには、これを、音声のように伝達の際消えさるものでなく、残そうとすれば、そこに視覚言語とか、ビジュアル・コミュニケーションとよばれる事象を考えない訳にはゆかないでしょう。

また、言語は文章に書きとめ、綴られて始めて、他人を相手にするばかりでなく、自分自身によびかけます。思うこと、考えることが人様に役立ち、広がり、内容を深め、高めることになっていくわけです。

われわれの頭の中で考えることを、独りごとを加えながら、「ああでもない、こうでもない」というている中に、考えていることが、自分なりにはっきりと判ってきて、自分が自分の中のもうひとりの自分に語りかけてでもいるように、他人に語ると同様に、そのうえさらに自分のいおうとしていくことが、他人に語る以上に“はっきりと悟る”という立場に導入される。こんど音声言語の形で、他人に語りかけるときに、最も適切に伝達できる素地をまとめ上げる結果となるのです。これなど、少し自分の考えを深め、広め、高めようとする人間にとっては、普通の事柄と私には受けとれるのです。

この場合の言語は、主として音声による言語、つまり“ことば”として、少しく固定的に考えられてきたように思われます。しかし20世紀初頭から試みられてきた立体派をはじめ、抽象的な形象・心理的な訴求など伴った新しい造形の世界には、それ自身として、視覚言語とよばれる“新しい、目に訴えかけることの中にも、他人の心情に伝達していく”という「言語芸術」が、既に発展し続けてきているように、私には思えるのです。

言語は、思想・情緒・感銘・事象を伝達する機能をもつと同時に、それらの人間本来の思惟・印象を、一つの形態・様式をもつ意味体系の中に位置づける、いいかえれば、まとまりと変化を跡づけるという機能を持っています。言語芸術はこの

機能を昇華して、多くの業績と表現の多様さを発揮してきました。『造形の言語』も、同様に発展してきたし、思いがけないほどの表現性を獲得しています。一方では、人間の思いが何ひとつとして言語で表せないものはない——と考えられつつ、他方では言語を用いて、即座に何事であっても、他人に伝達できるのだ——と考えるのは、一つの虚妄にすぎない、という反省も今世紀には育てられてきたと私は考えます。

ましてや、喜怒哀楽などの感情の流露は、人間の表情の激しさがよりの確な表現であると考えるのは、最近ことさら、テレビ画面のニュース報道などで、『生（なま）のままの表出という言語以上の訴求力が知らされている』といえるのではないのでしょうか。

言語は口を通じ、咽喉にある声帯から発する音声の代わりに、跡から読める文章となりました。文章は情動を伝えにくいけれども、永く、広く、長期間にわたって多くの人に感銘を与え、伝達する力、より豊かで、よりの確であったからこそ、人間の文化的活動の中樞を占有し続けてこれたのです。

Ⅲ. アナロジーとしての『文章と造形』

この文章に関する信仰にも似た畏敬の思いは、人類の造形遺産についても同じように感じられてきます。

仏のラスコー洞窟絵画を始め、多大の量と質との遺跡・遺物に見出される人類の造形そのものが、何とすばらしい訴求力をもって、まさに幾千・幾万語をもってする文章以上の内包をもっている事でしょう。一瞬一目のうちに果す“造形の訴求力”。時に誤認や錯誤解釈の多様多岐・複雑さえもひき起こしています。でも私は、ここで文章と造形を並べてみたい。何故なら、造形芸術の直観性・表現性を、感じるからです。その上さらに、私は今までに読んだ「文章論」とくに文章の表現に当たっての意味構築論・表現要素論に注目します。

こうした文章に関する論議が、ちょうど造形に

ついでに論議とぴったり符合しているように思えるので、「まさにアナロジー」と思えてくるからです。

『すばらしい文章といえるのは

① 長く記憶にとどめて、(強く)深い印象を読む人に与えるもの

② 何度となく繰り返して読めば、読むほど滋味の出るもの』

という所説を、谷崎潤一郎の「文章読本」の中で見つけた私は、なんと造形でも同じことがいえるなあ、と実感した記憶があります。

もっとも、記憶にとどめられたり、印象を読むたびに与えたり、滋味を覚えるのは、読者のセンスのよさが必要といえるでしょう。

でも、すばらしい造形、たとえば、大英博物館の中で、私はこの夏エジプトの彫刻群を見て歩き、本で読んだり、写真で見た印象より数段、強く深い印象を与えられた、そう確信しています。さらに何回も見に行けるなら、という期待の気持ちは、帰国以来なおも、募って来ていると実感しています。まさに印象が、私の中で映像化され、滋味のある造形の良さがくり返し思い出されるのです。

谷崎は「文章の味というものは、芸の味、食物の味などと同じ」として、芸のよさ、食物のよさは「賢愚・老幼・学者・無学者に拘らない」ので

あって、感覚というものは、生まれつき鋭い人と鈍い人の差はあるけれども、「多くは心がけと修養次第で、生まれつき鈍い感覚をも鋭く研ぐことが出来る。しかも研げば研ぐ程、発達するのが常であります。」と述べています。

その上、感覚を研ぐには「出来るだけ多くのものを、繰り返して読むことが第一」であって、「次に、実際に自分で作ってみることが第二であります。」と述べているので、尚いっそう造形との間で、アナロジーを、私は実感します。「なるほど!」という感じになっていくばかりです。谷崎が文章について説く如く、まず感覚を研ぐことが、文章力を育成していくために第一とするならば、造形についてその構成力を育成するためのスタートは、①まずやはり繰り返し、良き造形に触れること。次に②“造形の実作によってさらに感覚を研ぐこと”という要点に到達できていく、と私には思えてくるのです。(続く)

— ペンを擱くに当って —

なお文章のよし悪しをみ極め、良い文章になじみ親しむため、文章を要素にわけて考えようとする谷崎の文章読本の記事にもふれ、造形の要素を、アナロジーとして考え、自分なりの推論をすすめることは、次回にゆずっていきたく今回は考えます。